

資料3

外部の機関と連携した商品開発

1 外部の機関と連携した商品開発の主旨

「社会に開かれた教育課程」としては、教科横断的な視点を持って育成を目指していくこと、地域と連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する活動を「地域学校協働活動」として推進することが重視されています。

そこで、本校では、学校所在地の今金町の地域特性を活用し、地域が抱える課題の解決に挑むとともに、地域の学校や人々との交流を通じて、地域創生の実践者であり、共生社会の担い手を育成することを目指しています。

本校家庭総合科（1年生）は、北海道八雲高等学校総合ビジネス科（3年生）と交流及び共同学習を通じて、「今金町の定番土産商品」となることを目指して、「ショコラクッキー」を開発しました。この取り組みは今金町内の社会福祉法人光の里の「多機能型事業所ワークショップいまかね」と連携した取り組みであり、「高等学校・高等養護学校・社会福祉法人」との連携・協働による商品開発です。

2 社会福祉法人と連携した商品開発（平成28年度）

本校の創立20周年記念事業のうち、本校生徒会の取り組みの一つとして、「記念菓子」を開発して、創立20周年記念式典で配付することとしました。開発に当たっては、多機能型事業所ワークショップいまかねと連携し、将来的には「今金町の定番土産商品」となることを目指し、「記念菓子ショコラクッキー」を開発しました。

(1) ショコラクッキー開発の工夫

生徒会執行部の生徒が、夏季休業期間中にクッキーの形や味のイメージ、そして、型抜きによるのか、手作り感のある方がよいのか、色鉛筆で彩色したイメージ画を複数考案しました。ワークショップいまかねが、生徒の考案した複数の案に基づいて、複数の候補を製作し、生徒が試食して最終的なプランを決定しました。

デザインは円形にハート型が入るデザインとし、味はホワイトチョコレート×イチゴ（ハート部分）の1種類としました。商品名は「清流の薫り」とし、パッケージデザインは仮のデザインを作成しました。

完成したショコラクッキーは、創立20周年記念式典で記念品として配布されまし

た。その後は、本校の学校祭で販売して完売しました。また、平成29年2月に今金町で行われた第36回北海道障害者冬季スポーツ大会では、記念品として選手や参加スタッフに配付されました。



ショコラクッキー「清流の香り」

(2) ショコラクッキー開発の成果と課題

① 成果

- ・生徒会執行部の生徒が考案したクッキーが、創立20周年記念式典や学校祭、第36回北海道障害者冬季スポーツ大会で配付・販売され、好評を得たことにより、生徒は地域を意識した商品開発に手応えとやりがいを感じることができました。
- ・創立20周年を記念する生徒の主体的な活動を記念すべき年度に展開することができました。
- ・本校の教育活動や生徒への地域の理解・啓発を図ることができました。
- ・今金町の定番土産となることを目指した商品化への第一歩となる商品開発を行うことができ、関係機関との連携・協働がスムーズに行われるようになりました。

② 課題

- ・一般商品として販売する上では、味の甘さが人によって評価が分かれるため、購入層を想定した商品の質の向上が課題となりました。
- ・幅広い世代に好まれる味作りのため、同年代の高校生と協力して幅広い視点から商品開発を行うことが必要となりました。
- ・商品パッケージが仮のパッケージのため、購入層が手に取りやすい商品パッケージを考案する必要がありました。
- ・創立20周年記念事業における生徒会の取り組みとして行ったため、今後は商業科のマーケティングの基礎として指導を段階的に行う必要がありました。

3 高等学校と連携した商品開発(平成29年度)

商品開発と販売に実績があり、隣町に所在する北海道八雲高等学校総合ビジネス科と交流及び共同学習を通じて、新しいショコラクッキー「チョコっと ひといき。」を開発しました。

(1) 新しいショコラクッキー「チョコっと ひといき。」開発の工夫

① 商品開発の方向性の決定

5月に製造を担当するワークショップいまかねとの打合せ行い、北海道八雲高等学校と連携しながら、次の方向で商品開発をしていくことを決定しました。

- ① 味も新しくする。
- ② 商品名も「清流の薫り」から、味を変えることに合わせて新しくする。
- ③ パッケージデザインも考案する。

次いで、5月に北海道八雲高等学校総合ビジネス科との打合せを行いました。

- ① ワークショップいまかねと確認した3項目で商品開発する。
- ② 両校がそれぞれにアイデアを考え提案し合い、最終案をワークショップいまかねへ提案する。
- ③ 両校生徒が交流及び共同学習を行い、意見交換できる場を設ける。

併せて、今後の方向性として、次の3点も確認されました。

- ① 北海道八雲高等学校でも、北海道高等学校長協会商業部会が主催する「北海道高等学校商業教育フェア」(以下、「商フェア」という。)等で販売する。
- ② 両校の名前をパッケージに入れる。
- ③ 北海道八雲高等学校では、総合ビジネス科の3年生の「総合実践」の授業で交流及び共同学習を実施する。

② 商業科のマーケティングの基礎に基づいた商品開発

1 年家庭総合科の作業学習の食品加工の題材として、4 月から商品開発を開始しました。総合ビジネス科と共同開発するということもあり、商業科のマーケティングの基礎を生徒の実態に合わせた形で指導しながら、商品開発を進めました。

これらの検討は、教師がテーマを提示し、生徒がそれぞれ案を考えて持ち寄り、作業学習の時間に「協同学習」を活用して、生徒が話し合いを行い、案を練りました。生徒の話し合いでは、「商品企画会議」という会議名をつけ、話し合いのルールを「1 明るく 2 笑顔で 3 ブレインストーミング」の3 点に設定しました。

これらを守って活発に議論するよう生徒に促しました。話し合いが進むと言葉がきつくなってしまう場面もありましたが、生徒は「アイデアを考えるのは難しいけど、またやりたい。」「話し合いをしていると、笑顔がなくなってしまうので気をつけたい。」などの感想を話しながら、前向きに取り組みました、

ア 購入対象となる消費者層(ターゲット)の検討

はじめに、購入対象となる消費者層を検討しました。販売場所は本校学校祭と商フェアの2 箇所として大別しました。

- ・学 校 祭：女性3 5 歳から4 9 歳（F 2）
- ・商フェア：女性2 0 歳から3 4 歳（F 1）

これは、縫工製品の製作に向けて生徒が行っていた市場調査のデータを生かしたものです。家庭総合科の1 年生8 名が、5 月に学校や寄宿舍で上級生や寄宿舍指導員から学校祭の様子を聞き、来校者は主に保護者と先輩たちということを調査することができました。そのデータから、ショコラクッキーに興味を抱いてくれる人を選定しました。

商フェアは、新さっぽろサンピアザ（札幌市）で行うため、そのショッピングセンターを良く知る教員を対象として、来店者の客層を調査しました。

本校生徒はコミュニケーションを課題とする生徒が多いため、上級生や大人に話を聞くこと自体に大きなハードルがありました。そこで、各々が話しやすい相手を探し、情報を入手するとともに、情報の取捨選択も行うことができました。

イ 味の組み合わせの検討

次に、味の組み合わせを検討しました。使用可能なチョコレートは、「①ホワイト ②イチゴ ③抹茶 ④カカオ」の4種類があり、これをクッキー生地に合わせてショコラクッキーを作ることとしました。

味の組み合わせは、土産物店で販売されている類似商品を実際に食べ、おいしいと思うものを選び、「迷ったときには、ターゲットが好むものは何か？」という観点で最終案を決定しました。

最終案は、「①抹茶＋ホワイト」、「②ホワイト＋イチゴ」、「③ホワイト＋カカオ（ビター）」の3種類です。



試食・検討①



試食・検討②

ウ 商品名の検討

生徒それぞれが数点の案を出し、全34点の案を基に話し合いを行い、最終案を次の3点としました。

- ① しっとりチョコレートクッキー cho・co・ro
- ② チョコっと ひといき。
- ③ ひといき cho・co・ro

エ パッケージデザインの検討

商品名と同様に生徒が一人一人手書きの案を出し、全34点の案を基に話し合いを行い、味のイメージに合わせて、「ハート」や「風船」などのイラストをデザインした3点を最終案としました。

オ プレゼンテーションの作成

検討した3項目の最終案をスライドにまとめ、プレゼンテーションの資料を

作成しました。スライド作成の基本構成は教員が行い、スライドも発表原稿も細かな修正は生徒が役割を決めて責任をもって資料を次のとおり作成しました。



プレゼンテーション画面①



プレゼンテーション画面②

③ 北海道八雲高等学校との共同開発

北海道八雲高等学校総合ビジネス科3年生18名の「総合実践」の授業時間に本校生徒が参加し、交流及び共同学習による商品開発を行いました。

ア 第1回交流及び共同学習

本校生徒はかなり緊張していましたが、交流校の3年生のきめ細かな配慮のおかげで、スムーズに話し合いが行われました。両校から開発商品について、プレゼンテーションがなされ、その後は両校合わせて4グループに分かれ、3項目について意見交換を行いました。



プレゼンテーション



意見交換

イ 第2回交流及び共同学習

2回目の交流及び共同学習では、本校生徒は前回の経験を生かしてスムーズに話し合いに参加することができました。前回と同じグループで話し合いを再開し、各グループで最終案を次のとおり決定しました。

1 味の組み合わせ

- ・ 3種類 (① ホワイトにイチゴ ② ホワイトに抹茶 ③ カカオにイチゴ)
- ・ 味の組み合わせのポイント
 - ① イチゴの酸味＋ホワイトの甘味
 - ② 抹茶の渋み＋ホワイトの甘味
 - ③ 子供も食べやすい。見た目によい。
- ・ 味付けの基本
 - ★ ホワイトを基準として2種類用意する。カカオはビター、抹茶は渋めがよい。
 - ★ 若い女性が好む (F1：女性20-34、F2：女性35-49)。

2 商品名

- ・ 2種類 (① チョコっとひといき ② チョコっとひといきクッキー)
- ・ 商フェアの顧客は年配の方が多く、子供もいるため、シンプルが良い。
- ・ イタリア語やドイツ語の「ショコラーデ・ビスコット」もあったが、分かりづらい。
- ・ 「クッキー」を入れると分かりやすいと思うが、意見が分かれた。

3 デザイン

- ・ 2種類 (① 縦型 商品名のみ ② 四隅にハート)
- ・ 背景を透明にして商品が見えるようにした。
- ・ クッキーの4種類の色が入っている。
- ・ ハートがモチーフになっている (クッキーのデザインより)

④ ワークショップいまかねへのプレゼンテーション

ア プレゼンテーションの作成

北海道八雲高等学校でのプレゼンテーションの作成と同様に基本形を教師が作り、生徒がパソコンを操作してスライドの細部を作成しました。前回よりも生徒達だけで行える範囲が広くなり、スライドの細かな部分にも気をつけて作成することができるようになってきました。

イ ワークショップいまかねでの提案

6月末に本校生徒8名が、ワークショップいまかねを訪問して、最終案を提案しました。

1 商品開発の軸(コンセプト)

開発商品のターゲット

今金の学校祭 は F 2
女性 35歳～49歳

商業教育フェアは F 1
女性 20歳～34歳
昨年は、F3、M3が多かった 男女 50歳以上

プレゼンテーション画面①

2 商品の味

 ホワイトに イチゴ	 ホワイトに 抹茶	 カカオに イチゴ
・イチゴの酸味 にホワイトの 甘み	・抹茶の渋みに ホワイトの甘み	・子供も食べや すく、見た目 が良い

プレゼンテーション画面②

戸室孝俊施設長からは、「味の細かな点にも提案していただいたので、製造しやすい。」「分かりやすい発表でした。」とお褒めの言葉もいただきました。



ワークショップいまかねへのプレゼンテーション



試作パッケージ



試作品

(2) 新しいショコラクッキー「チョコっぴ ひといき。」開発の成果と課題

① 成果

- ・生徒は商品開発のアイデアを考えることの難しさを感じた一方で、商品開発の楽しさややりがいを感じるようになり、商品開発の意欲が高まりました。
- ・生徒は話し合いをしているうちに、意見がまとまらず、笑顔がなくなってしまう場面もありましたが、そのことを受け止めて、「気をつけたい。」など、前向きに取り組むことができました。
- ・高校生との交流及び共同学習において、話し合って案をまとめることにより、コミュニケーション力や意欲の向上が図られました。
- ・福祉施設職員への提案を通じて、未経験の場でもプレゼンテーションやコミュニケーションを図ることができました。

② 課題

- ・今後は、販売を含めた生産管理や次年度の発注計画を考えるなど商品開発の学習を継続して行うことが課題となりました。
- ・販売場所については、より多くの人に商品を知っていただくために、商フェアや学校祭以外の販売場所で販売を計画することが課題となりました。
- ・北海道八雲高等学校は、八雲町の「スイーツフェア」に出品してほしいと依頼を受けており、本校は「今金町ふるさと納税の返礼品」に加えていただく予定です。

（家庭総合科主任 小林和幸）